

「 どう？ 食べられそうかい？ 」

クロフカのすぐ脇に膝をついてかがみ込むと、顔の近くにご飯の入ったボウルを置いて、マーサおばさんは話しかけた。

光の向こうから、マーサおばさんのシルエツトが見える。

「 ああ、おばさん、マーサおばさん……ありがとう……今までほんとにありがとう…… 」

クロフカは、不自由になった後ろ肢を引きずるようにして立ち上がりかけ、長くて毛足の乱れた尻尾を思い切り振った。

クロフカの眼から涙がこぼれた。

そして声にならない声で、ハオン、ハオン……と答えた。

「 いいよ、いいよ、無理しなくて……苦しくはないかい？ シツポもそんなに振ったら疲れるだろうに…… 」

「 おばさん……長いこと世話になりました。 ……僕ア、今度こそホントに逝かなきゃなりません…… 」

マーサおばさんは、投げ出されて動かないクロフカの後ろ肢をそうつとさすった。

「 痛くはないかい？ 」

彼女の手の感触が、優しくあたたかく、そして懐かしく、嬉しかった。

「クロヤ、クロフカヤ……お前もずいぶんと歳をとったね……長いこと私やテオおじさんを楽しませておくれただね、ありがとうね……今はゆつくりと養生をおし……」

「お婆さん……僕ア……うまく言えないけど……此処での暮らし、本当に幸せだったよ……」

肢をさすられながら、頭を撫でられながら、クロフカはマーサお婆さんに気持ちを伝えようと、必死にハオン、ハオンと言い続けた。

「僕ア、此処んちにきて 本当によかったよ……」

マーサお婆さんもクロフカを撫でながら、話し続けた。

「お前は最初、なかなか懐かなかったから、名前もクロフカなんて安直な名前を付けてしまった……。けど、私は結構この名前、気に入ってるんだよ……」

「いろいろな素敵なことがあった……いっぱい嬉しいことがあったよ……なんてったって、いっとう嬉しかったのは、新しい名前をつけてもらったことだよ……僕アこの名前、大好きだよ……」

「牧場にいたロシア人の馬番さんも、お前の名前は一度で覚えてくれたね……散歩のたんびに声掛けてくれて……楽しかったね……」

「それから嬉しかったことは……新しい首輪に替えてもらったとき

だったよ……黄色の革の首輪でさ……首振るたんびに、首輪につけた鑑札がカチャカチャいつてさ……そうして、おばさんの脇にひかえて、散歩のお供するのが……とつても……とつても嬉しかったよ……」

心地よい風が、茂みを吹きぬけて柔らかな花の香りが流れてきた。

「クロフカ……お前を初めて見つけたのも、このライラックの茂みだったね……それ以来、お前はこの木陰がお気に入りでね……」

マーサおばさんは犬を撫でながら、空を見上げた。

「あれからずいぶん時が経った……いろんなことがあったね……ひよろひよろしてたこの木も、こんなに大きく茂って……」

「クロフカ……お前は野良でやって来たから、いろいろ棲みつく家も選べただろうに……。うちに来てくれてありがとうね……楽しい素敵な時間を過ごしてきたよ。……感謝しているよ、どんな時もお前は私の傍にいてくれたね……私もテオおじさんも感謝しているよ……こんなに具合が悪くなっちゃったけど……ありがとうね」

「楽しかった……楽しかったのは僕のほうです。何処へ行くのも、おばさん、あなたのお供ができるのが本当に嬉しくって楽しくって……みんなに自慢したいくらい嬉しくって誇らしかったんだ……」

「クロフカ……食べないのかい。このあつたかいスープ、冷めないうちにおあがりよ……食事が済んだら、ナーヤが医者に連れてってくれるって……」

マーサおばさんには、犬の言葉は分からなかったが、何か尋常でない

気配は感じ取っていた。

…この仔は、いつもとは様子が違う…。なにやらとても強い意志で何かを伝えようとしている…。ひよつとして、もう居なくなるんじゃないだろうか…

クロフカはかすれる声で話し続けた。

「もう…もう医者は…いいっす…ナーヤさんには、おばさんからよろしく言っと思ってください…すんごく楽しかったよって…」

クロフカは、顔をまっすぐに挙げてマーサおばさんのほうを見た。

「今まで本当にありがとう…僕ア…世界の幸せ者です…」

「クロフカ…どうしたの？…何処か苦しくはないのかい？…もう何も言わなくていいよ…無理にシッポも振らなくていいよ…」

「そろそろいこうかと思うんで…」

クロフカは前肢を踏ん張ると、不自由な肢で立ち上がった。

「…おばさん、どうぞお達者で…」

「お前、行くのかい？…どうしても行くのかい？」

マーサおばさんは、一瞬驚いたようにクロフカを見つめ、止めようと

したが、彼の意思が分かったように、制止の言葉を呑み込んだ。

「 ……そうかい ……やっぱり行くのかい ……おまえが居なくなると ……寂しくなるよ …… 」

「 ……おばさん …… 」

「 ……そんだったら、行く前に少し食べてお行き …… 」

マーサおばさんの言葉をきいてか、不安定に立ちながらも肉入りスープをぴちゃぴちゃと少し飲んだ。

そして、もう一度立ち上がり、歩きはじめた。

動かなくなったら後ろ肢を引きずり、ゆっくりと芝生のスロープを下ると、庭を抜け、門を出た。

何かクロフカの姿勢に強いものを感じたマーサおばさんは立ち尽くしていたが、門から出て行く老いた愛犬に、思い余って

「 クロフカ ……クロフカ …… 」

と、呼びかけた。

しかし、クロフカは立ち止まらず、二度と振り返らなかった。

おぼつかない足どりで、トボトボと、でも決して止まらず、まっすぐ歩いていった。

マーサおばさんは追ってはこなかった。

見送ってくれている彼女の気配を、クロフカは背中で尻尾で、全身で感じていた。

涙で前が見えなかった。

「 ……おばさん……さよなら…… 」

それから、しばらく経って、庭でナーヤさんの声がした。

「 ねえねえ、かあさん大変！ クロフカがいなくなっちゃったの！ 」

「 …… 」

「 病院に連れて行こうと準備したのに……何処行ったのかしら？ あんな肢では、そう遠くへは行ってないと思うんだけど…… 」

「 …… 」

「 ひよつとして運河の方にも行っちゃったのかしら……やだ！ 大変！ もしも落ちたりしたら……あの仔は肢が悪いのよ。それに水が大っ嫌いだし…… 」

マーサおばさんは、何も答えずに自分の部屋に入ったつきり、その日午後じゆう出てこなかった。

部屋で、チェストの上に置かれたマリア像に向かってひそかに祈りつづけた。

家の外では、庭や家の周りで路地で通りで、犬の名を呼ぶナーヤの聲が響いていた。

つづく